



倶利伽羅峠から地獄谷を望む

京都と北陸を結ぶ北陸道は、近江の湖西北部から、越前・加賀・越中を経由して越後に至り、さらに海路佐渡に通ずる古代からの官道で、以来中世・近世でも、ルートを少し変えながら、多くの人馬が行きかった。

その道筋は、加賀国かがのくにに入ると日本海沿岸に沿って北東に進むが、同国の竹橋たけのはし（現石川県津幡町）より越中国境の砺波山越えの道となり、やがて越中の埴生はにゅう（現富山県小矢部市）に下って、砺波の平野部に抜けていた。また、この山越えの峠一帯は「倶利伽羅くりにみやま」^{※1}の地名で呼ばれ、標高277mの国見山が最高所で、北陸道の要衝であった。

手向けの神と峠の寺

古くは『万葉集』所載の越中守大伴家持の長歌の中に、「砺波山手向神えつちゅうのかみおとものやかもち」^{※2}がみえ、峠を越えて旅する人々が幣などを供えて、道中の安全を祈る神として知られた。平安前期の元慶2（878）年には、手向神てむけのかみにかみざう従五位下の神階が授けられ、平安中期頃になると、神仏習合思潮の普及によって、手向の社に別当寺べつとうじが成立し、峠の守護神は、倶利伽羅竜王くりにみやま（不動明王）を本地ほんじとすることができるようになり、それが峠の地名になっていた。

この峠の寺社は、初め倶利伽羅堂と称したが、やがて倶利伽羅長楽寺くりにみやまに発展する。

加賀路を駈ける平氏軍

倶利伽羅峠の名が広く知られたのは、平安末期の源平争乱期において、北陸道最大の合戦の舞台になったことが『平家物語』で語られたことによる。

治承4（1180）年、後白河法皇の第二皇子である以仁王の平氏追討の呼びかけに応じた源（木曾）義仲は、翌5年6月の信濃国横田河原よこたがわらの合戦で、平氏方の越後の豪族城助職に勝利すると、北陸道諸国の武士を糾合して京をめざした。

一方、義仲優位の北陸道の劣勢を挽回し、義仲の上洛阻止をはかる平氏方は、寿永2（1183）年4月、平維盛（清盛の嫡孫）を総大将に、10万余騎の大軍を義仲追討軍として、北陸道に向かわせた。

平氏軍は先ず4月27日、義仲方の最前線基地となっていた越前の越前（現福井県南越前町今庄付近）を陥落させ、5月3日には、加賀国に進攻して義仲方の林・富樫氏らの地元武士を撃破する。『源平盛衰記』^{※6}によれば、このとき加賀・越中両国の武士は、能美郡

※1 倶利伽羅（倶利伽羅、サンスクリット語の“kulihah”）は不動明王の化身とされる竜（竜王）の名。

※2 旅人が幣などを手向けて道中の安全を祈る神。山の峠や坂の上などに祀ってある神。道祖神。

※3 専ら神仏習合が行われていた江戸時代以前に、神社を管理するために置かれた寺のこと。神宮寺。

※4 仏・菩薩が人々を救うために神の姿となって現れた垂迹神に対して、その本来の仏・菩薩。本地仏。

※5 神仏習合により長楽寺となったが、明治の神仏分離により廃寺となり、跡地には手向神社がある。

※6 平家物語の異本の一つ

あたかのわたし
安宅渡で陣を構え、平氏の大軍に抗戦したが打ち破られ、源氏方の井家範方^{いのいえのりかた}一党は根上松^{ねあがりのまつ}※7付近で討死したとある。

勝ちに乗じた平氏軍は、さらに加賀路を北上する。『平家物語』によれば、10万騎の内の本隊7万騎は、5月11日、加賀・越中国境の砺波山（倶利伽羅）に進んで、山麓^{くろさかくち}の黒坂口に陣を布く義仲軍と対峙し、別働隊3万騎が、能登・越中国境^{しおやま}の志雄山^{しおのり}に向かったとある。

またこのとき平盛俊率いる平氏の先鋒5千余騎が、砺波山を越えて越中に攻め入ったが、義仲軍の今井兼平^{いまい かねへ}勢6千余騎に撃退され、砺波山へと退却していた。

倶利伽羅の合戦

『源平盛衰記』には、義仲は、砺波山黒坂の北麓^は植生社八幡林^{にゅうしや はちまんばやし}付近に陣を取り、平氏の大軍は、倶利伽羅峠^{さるがぼんば}の猿馬場^{さるがぼんば}の塔橋より黒坂口にかけて陣を布き、赤旗を山々に並べ立て壮観を呈したとある。

だが11日の夜半、戦局は一変する。義仲軍が、安眠を貪る平氏の宿営に急襲を敢行したのである。義仲は、合戦に先立ち植生八幡宮に戦勝祈願の願書を納める一方で、密かに砺波山の周囲に七手に分けた軍勢を配置し、一気に挟撃^{きょうげき}を仕掛けたのであった。このため周章狼狽^{しゅうしょうろうばい}した平氏軍は不意を衝かれて大敗を喫し、倶利伽羅の谷^{あし}※8は、多くの敗軍の将兵の死骸で埋め尽くされた。

この合戦では、義仲が400～500頭の牛の角に、燃えた松明^{たいまつ}を結んで平氏の陣地に追い入れた火牛戦法が、平氏軍の混乱を生み、勝利に結びついたとの話や、混戦の最中に、白装束の30騎ばかりが突然現れ、浮き足だった平氏軍を谷底へ誤って墜ち下るよう導いた



源平倶利伽羅合戦図屏風（石川県津幡町竹橋・倶利伽羅神社蔵）

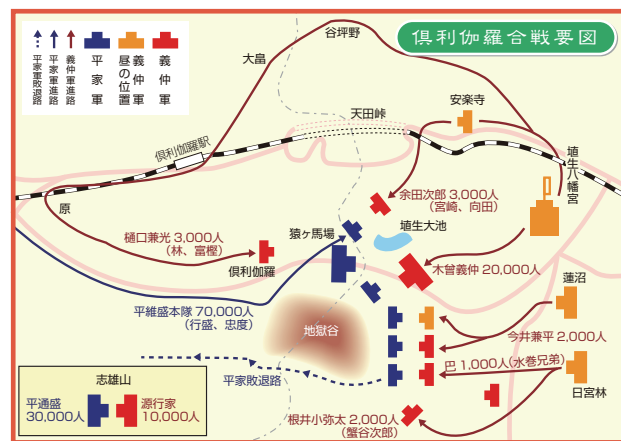
という、白山権現^{はくさんごんげん}が義仲の勝利を扶けた霊験譚^{れいげんたん}が、『源平盛衰記』にみえている。殊に義仲の火牛戦法は、「倶利伽羅合戦」を源平合戦圧巻の名場面として、永く後世に語り伝えることになった。

しかしこの合戦については、右大臣九条兼実^{くじょうかねね}の日記（『玉葉』）に、「去る11日、官軍（平氏軍）の前鋒^{ぜんぽう}が勝ちに乗じて越中に攻め入ったが、木曾冠者^{かじや}義仲・源行家等の源氏方との戦いに敗れ、過半討死したらしい」との情報を簡潔に記すのみで、当時京都では、合戦の詳細は伝わっておらず、いまだ平氏の敗北は、危機感をもって受け止められていなかった。

火牛戦法異説

ところで倶利伽羅合戦における義仲の火牛戦法の話は、『源平盛衰記』の記事にみえるだけで、他の『平家物語』諸本の中では知られていない。だが『長門本平家物語』※9によれば、平氏軍が砺波山に向かうに先立ち、義仲方の富樫宗親・林光明の加賀武士を、その城に追い込めた際、越前白山平泉寺長吏の斎明の献策で、石川平野にいた牛を取り集め、松明に火を灯して牛の角に括り付け、城の木戸口の上の坂に向けて追い上げたところ、城が陥落したとあり、そこでは、火牛の戦法は義仲ではなく平氏の戦法となっている。

この戦法は、中国の春秋戦国時代に、齊の將軍田單が牛に竜の模様を描いた赤衣を着せ、角に剣を結び、尾に草^{あし}を束ねて縛り、それに油を注ぎ火を付けて、敵軍（燕国）の城内に追い込み勝利した故事に因むものという。この真偽は別として、『源平盛衰記』は倶利伽羅合戦の戦闘描写を高めるために、その故事を義仲の戦法に採用したのであった。



倶利伽羅合戦要図

※7 樹根が地上高く隆起した松で、旧「根上（ねあがり）町」（現能美市）の町名の由来。『源平盛衰記』や『義経記（ぎけいき）』などには源平ゆかりの地として登場する。

※8 平氏の死骸で埋め尽くされた谷を地獄谷、血膿の流れた川を膿川（うみがわ）と呼んだ。

※9 長門国赤間関（現山口県下関市）にある阿弥陀寺（現在の赤間神宮）に伝来した写本にちなみ「長門本平家物語」と呼ばれる。